

いび茶吟味、鼻は使えず

コロナ対策で異例の形式

揖斐川町で一番茶共販会

揖斐郡揖斐川町極楽寺のJA全農岐阜美濃茶流通センターで27日に行われた「美濃いび茶」の今季初の

一番茶共販会。今年は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、例年とは異なった形式で実施した。茶葉の入



った拝見盆は間隔を空けて設置し、密集しないようにした。

美濃いび茶は同町と同郡池田町の約200畝で栽培されている特産茶。今年は4月中旬以降に気温が低い日が続いたため生育がやや遅れたが、まろやかな味わいの良質な茶葉に育っているという。

共販会には共同茶工場3カ所が10点計42品を出品。新型コロナウイルス対策で茶葉を直接触ったり香りをかいだりすることは制限した。岐阜、愛知両県から13の小売、卸

新型コロナウイルス対策として、茶葉の入った拝見盆が間隔を空けて設置された共販会。揖斐郡揖斐川町極楽寺、JA全農岐阜美濃茶流通センター

売業者が参加。全員マスクと手袋を着用の上、茶葉を手にとって色や形をじっくりと確認した。この日の1キロ当たりの平均落札額は3593円。最高価格は昨年より約7千円高い5万6727円で、いび茶の里(揖斐川町桂)が落札した。明治屋茶舗(岐阜市)の藤森茂美社長(60)は「例年なら茶葉に素手で触れ、香りをかいで判断するが、今回はできないので品質の見極めが難しかった」と話した。(杉原康仁)